

# 浦和大学発

## 研究レポート

□9□

浦和美園駅4番バス停は、これまでの人生で経験した災  
浦和大学のスクールバスの乗 害の話を知り、複数回の被災  
降所です。それとともに、今 さら立ち直る契機をどのよう  
は連休（5月18日現在）して につかむのを知るために調  
査を続けています。この調査  
ですが、東北高速バス「遠 査を続けています。この調査  
野・釜石号」の乗車停留所で から分かってきたことは、岩  
もありません。高速バスが通 手県三陸沿岸地域に暮らす人  
釜石は岩手県三陸沿岸にあっ 々や家族にとつて、東日本大  
、東日本大震災では被災し 震災の津波被害が初めての被災  
た地域です。私は、2020 災経験というわけではなく、  
年3月まで岩手県に住んでい 複数回の津波や戦争によつ  
ました。昭和8年の三陸大津 て、その時々大きな被害を  
波を経験した宮古や田老、山 受けながらも、三陸の地で生  
田や大槌、釜石在住の女性に 活を立て直し、子どもを産み

育ててきたということでもし ぶことがあります。そしてそ  
た。被災を転機に、新たな仕 の次の話では、今回の東日本 査にも参加し、東日本大震災  
事を始める女性や次世代の生 大震災からの復興の「見通し」 被災後、避難所運営や臨時の  
活基盤を漁業や農業という生 について、戦後の復興と高度 市役所窓口業務に奔走し、  
業を継承させず、雇用の生 経済成長期の経験を参照して ち場」を守り、仕事を続けて  
活に転換させる家族戦略を取 未来予想が語られる場合が多 いた釜石市役所職員への聞き  
っていた人々がいたことも分 くることも分かってきまし 取り調査をしました。この研

### 竹村 祥子 社会学部現代社会学科教授

## 浦和美園駅4番バス停から

かつてきました。

た。

平成23年3月に起きた東日 又大震災の被災体験を女性に 所を中心とする研究チームが  
8月の艦砲射撃の被災状況と 「震災の社会的記憶」を継承す  
その復興過程の経験に話が及 ぶための研究「震災の記憶才



究チームメンバーが行った 身としては、コロナ感染防止  
「釜石市民の暮らしと復興に を考るとなかなか三陸沿岸 についての意識調査」の自由記 を訪ねることはできません。  
述欄にも、「艦砲射撃の被災 浦和美園駅4番バス停か  
からも立ち直ったのだから今 和大学に通う日々ですが、今  
回も大丈夫」といった記載が 月は難しくても、夏休みにな  
あつて、戦争経験のない市民 月には難しくても、夏休みにな  
にも、震災の社会的記憶とし れば、釜石に伺えるのではな  
て受け継がれていて、それが いかと、4番バス停前で晴れ  
釜石復興の原動力にもなるこ た空を仰ぐ今日この頃です。  
とが分かりました。聞き取り 夏には、東北道高速バスに乗  
調査はまだ続けていこうと思 三陸の海近く、釜石へ聞  
っています。浦和大学に着 き取り調査に出かけたいと思  
任して、東京住まいとなつた います。

たけむら・さちこ 中央大学大学院文学研究科社会学  
専攻博士課程後期単位取得退学。岩手大学名誉教授。2  
020年3月まで盛岡市に在住。専門は、家族社会学。  
岩手県三陸沿岸地域に暮らす女性からの聞き取り調査を  
継続している。